



洞爺発の新聞発刊

地域を越えて届ける湖畔の人々の声

profile

森高まき(写真右) 長崎県出身。洞爺地区在住。趣味はキノコ採り。29歳。
塩野谷通(同中) 花和地区出身で現在も在住。趣味はイベント開催。43歳。
青山剛士(同左) 札幌出身。洞爺地区在住。趣味は本作り。45歳。
レイクタイムズ編集部員を募集中。問合せは toyakopress@gmail.com まで。

水の駅などで無料配布中。

Spotlight

スポットライト



洞爺湖の「今」を伝える

レイク タイムズ LAKE TIMES

創刊のきっかけとなったのは、湖と共に暮らす人たちのつながりでした。湖畔の暮らしの魅力伝えるタブロイド版の全8号には、洞爺湖の今を伝える熱意が詰まっています。

レイクタイムズを構想したのはレイクヒル・ファームを支える塩野谷通さん。以前「洞爺の魅力は人である」をコンセプトとした冊子を作りました。増刷を重ねるなど好評でしたが、リアルタイムで洞爺湖のことを伝えられる媒体を求めていました。初版から今に至る10年の間には、湖畔に移り住む人たちが続いています。様々な技術や経験を持つ個性派も多く、塩野谷さんの構想を実現できる人材が集まりました。取材は、出版社に勤め、現在は洞爺地区で書店「たまたま書店」を営むフリーランスの編集者森高まきさんが、紙面のデザインやレイアウトは、デザイナーユニツ

ト「drop around」(ドロップ アラウンド)を運営する青山剛士さんがそれぞれ担当。8月に発刊した第1号はこだわりの企画を詰め込みました。「どこから見た洞爺湖が好きですか？」をテーマにした特集では、取材中に出会った人々お気に入りの景観を地域や世代の垣根を越えて紹介。森高さんは「答えてくれた人がみんな温かったです。読んで気になった人はぜひ直接訪れてほしいです」と笑顔。支笏洞爺国立公園を語る対談では、国立公園の在り方や洞爺湖の環境保全の問題について率直な意見を伝えました。青山さんは「洞爺湖の良いところだけではない課題にも触れたいです」と話します。

東奔西走

町 功労表彰などを受賞された方の撮影に伺った10月の第4週は、一気に冷え込みが進んで羊蹄山も雪化粧。油断して薄着をしていたため、凍えながらの取材となってしまいました。今年は暖冬との予想もありますが、風邪にはしっかり気を付けます。(D.Y)
私 が洞爺湖町役場に入庁してから半年が過ぎました。上司や町民のみなさんと関わる際、未だに「なぜこんなに優しくしてくれるのか」と驚きます。まだまだ未熟なのにも関わらず分け隔てなく接してくれるみなさんに、心が暖かくなります。(Y.A)

今月のワンショット



フロアカーリング交流会